



企業名：うきはの宝株式会社
所在地：福岡県うきは市浮羽町妹川4333-1
代表：大熊 充
設立：2019年
サイト：<https://ukihanotakara.com/>

うきはのばあちゃんが、日本の未来を変える。



アイデンティティ/事業を突き動かす内発的動機

75歳以上のばあちゃんたちが働ける会社をつくりたいという想いから「うきはの宝株式会社」は生まれました。まだまだ元気であるにも関わらず働く場所がなく、国民年金の受給だけでは生活もままならないという状況を変えるために始めた事業。2023年現在、5期目を迎え、関わるばあちゃんの得意分野を活かして「食」と「料理」の事業に取り組んでいます。立ち上げのきっかけは、代表である大熊氏のバイク事故でした。約4年間の入院生活の中で絶望していた時、同時期に入院していたばあちゃんに救われて生きる意味を見出したと言います。恩返しをしたいという強い想いから起業を決意。ばあちゃんたちの「月にあと2,3万円あれば助かる」「日常生活で人と会うことがなく孤立している」といった声に耳を傾け、これらの課題を解決し、関わるばあちゃんたちに幸せになってもらいたいという想いで事業を展開しています。



うきはの宝で活躍するばあちゃんたち

ビジョン

将来、75歳以上のばあちゃんたち500人の雇用を直接的、間接的に生み出すことを目指しています。そこに、ばあちゃんをサポートする若手スタッフも関わることで20～90代が協力して働く「多世代型協働」というビジョンを描いている大熊氏。誰も孤立することなく、働く場所が居場所となるように。超少子高齢化社会に向けて、このモデルを確立し、必要な地域で導入していくことを考えています。

強みや特徴

うきはの宝のコアメンバーがデザイナーであり、ロゴや商品パッケージを手がけています。また、事業戦略やプロモーションなどもデザインできることが強みです。うきはの宝のメインターゲットは、作り手の顔が見える食品に興味があり、都市圏に住んでいる30～45歳の女性。新商品を開発した際、クラウドファンディングを活用するなど、ターゲットに合わせたアプローチを行っています。



ばあちゃんたちが手がけるおいしい料理

経営課題

うきはの宝を起業する際、大熊氏は周囲から「儲かるはずがない」「ビジネスとして成立しない」「ばあちゃんたちに生産性はなく、生産効率は悪い」「やっても無駄だ」「続けられるはずがない」と言われ続けてきました。周囲には反対されましたが、誰よりもばあちゃんの声聞いていた大熊氏は、高齢者が経済活動に加わることの必要性や可能性を、当時はもちろん今でも信じ続けています。また、高齢者を直接サポートする若者を呼び集めることも課題となりました。さまざまな意見や課題がある中で、大熊氏が意識したことは「誰かを助けられるか、感動させられるか。自分だけのためではなく、誰かのために。」ということ。それは商売の本質でもあります。ばあちゃんが働くためにものを生み出し、必要な方へ届ける。「こと」と「もの」を合致させて、事業を推進させていきます。

デザイン経営での解決策

ばあちゃんたちが切り盛りする飲食店やクラウドファンディングで430万円以上を集めた万能調味料など、「こと」と「もの」が合致したことで、ばあちゃんたちを中心に広がっていく取り組みに多くの方々が共感しました。昔懐かしい手作りの味を欲している方々や、いきいき元気に働くばあちゃんたち、またその姿を見て自分も将来楽しく歳をとりたいと思う50代・60代の方々など、多世代が関わりみんなが幸せになる社会を目指しています。多世代型協働モデルが生まれて実装されたうきは市の名前が全国に知れ渡る日も、もうすぐかもしれません。

「やらないと分らないと思います。だからこそ、デザインを活用しながら変化し続けているのです」と語る大熊氏は、師匠から「探究心を持って取り組み、トライ＆エラーを繰り返し挑み続けること」と言われ、今もその気持ちを大切にしながら邁進しています。

アウトプット



生きる知恵が詰まったばあちゃん新聞



積極的にさまざまなイベントに出店

これから

事業を展開して、ばあちゃんの生きがいを創出し、収入もアップしてきました。ただ、サポートを行っている若いスタッフに負荷が生じており、軽減することを考えています。今はチャレンジするフェーズのため、さまざまなことを試しながら仕事内容の平準化と仕組み化を目指している大熊氏。これから超少子高齢化社会が加速する日本において、うきはの宝が構築する多世代型協働というモデルが、未来を明るく照らすヒントになるかもしれません。